

Title	総合教育セミナー「イベリアとイベロアメリカの歴史・文化」
Sub Title	
Author	瀧本, 佳容子(Takimoto, Kayoko)
Publisher	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集編集委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集 (2007.) ,p.215- 227
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00000001-0215

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

総合教育セミナー 「イベリアとイベロアメリカの歴史・文化」

瀧 本 佳容子

I. はじめに

総合教育セミナーは、日吉の教員が各自の専門を生かしたさまざまなテーマについて学生を指導し、学生が自分で行う調査・報告・討論を中心に進められる、少人数制の授業である。総合教育科目Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類に設置されており、卒業に必要な総合教育科目20単位中2単位以上取得しなければならない指定演習科目でもある。2005年度の新学期施行を契機に、原則として日吉全教員が担当するようになった。

「外国語科目・総合教育セミナー履修案内」掲載の「総合教育セミナーのすすめ」には、その目的が次のように述べられている。教員から学生への知識伝達を効率的に達成する方法として、大学教育においては多くの場合、講義という形態がとられているが、講義の場にいる者の間で議論や意見交換が行い難いという弱点がある。これを補うために、商学部では総合教育セミナーという授業形態を提供している。この授業を通じて、最終的には人生観・価値観形成の契機も得られるかもしれない。

また、次の下りにも特に注目しておくべきであろう。

商学部の学生の資質として、自分の考えを論理的にまとめることができ、その考えを的確な日本語あるいは外国語のことばや文章で表現でき、さらに他人のことばや文章の意味を正確に理解でき、その上で有益な議論が展開できる能力が求められています。この能力を養うことが総合教育セミナーの主な目的なのです。

言い換えれば、コミュニケーション能力を養うことが総合教育セミナーの主目的だというわけで

ある。いかなる職業や生き方を選択しようとも、他者と関わりを持ちつつ営む社会生活において、個人の責任と義務を全うし、何らかの形で自己表現を行おうとするにあたり、会話と文章とを問わず他者と意思の疎通を円滑に行える能力は必要不可欠なものである。これを、教員・学生間の密接なコミュニケーションとレポート作成を通じ教養課程で培うことが、総合教育セミナーの目的なのである。

総合教育セミナーは、学生一人一人に目配りがきくだけに、学生各自の個性に合わせた対応を迫られるライブ感に満ち満ちた授業になる。教員は、自分の限界を露呈してしまうこともあり、学生たちからは実に多くのことを教えられる。

本稿では、今後の授業運営のための覚書も兼ね、本稿執筆までに筆者が担当してきた総合教育セミナーの報告を行う。(本文中には、カギカッコで示して、2002年度から実施している授業評価アンケートへの学生の回答を引用していく。)

Ⅱ. 「イベリアとイベロアメリカの歴史・文化」概観

筆者は2000年度以降、塾派遣留学期間中の2003年度を除き連続して総合教育セミナーを担当してきた。学生の興味に応えるためには、筆者の専門である中世から近世にかけてのスペイン文学史に限定せずなるべく間口を広くすべきかと考え、担当初年度より、スペイン語圏を対象とした歴史・文化に関するレポートを書く授業として開講した。さらに、2005年度からは、ポルトガル語圏も対象とした「イベリアとイベロアメリカの歴史・文化」というテーマにした。

1. 授業内容

授業の具体的内容は、主に以下の3要素から成る。

1. レポーター形式の輪読：文献精読と文章要約の練習。スペイン史に関する文献の近世の章を用い、順番を決めて学生に要約を作らせる。
2. レポート・論文作成技術の習得：文献表の作り方、注のつけ方など、卒論にも応用できるレポート・論文作成技術をまとめたプリントを配布し、具体例をあげながら説明する。年度末に提出するレポート作成（参考文献表・付録も含め最低400字×25枚〔半期開講だった2006年度だけは400字×15枚〕、上限なし）には、この論文作法を遵守せねばならない。
3. レポート作成のための発表：学生が自分の決めたテーマで発表を行う。レジュメ作りと口頭発表の練習。

後に詳述するが、最後の「レポート作成のための発表」は「テーマ発表」と「下書き発表」に分

けている。「テーマ発表」も「下書き発表」も数回ずつ行う。「テーマ発表」では、学生はレポートの骨格を示しつつ、テーマに関する調査成果の発表を行う。その後の「下書き発表」では、学生はレポートの下書きをそのまま読み上げる。第1回「下書き発表」の規定は400字×10枚で、回を追うごとに5枚ずつ規定枚数を増やす。これは、ゼロから400字×25枚を目指すよりも無理なくレポートが完成するようにとの配慮である。「下書き発表」の段階で教員は添削を始める。輪読・テーマ発表・下書き発表のいずれにおいても、発表者以外の学生は、内容に関する質問・コメント、文章に関する指摘など、何でもよいから一度は発言しなくてはならない。

レポートの完成版がすべて出揃ったら、教員は表紙や目次を作成して製本し、学生に配る。また、授業評価アンケートへの回答をもらう。製本したものを受け取る時の学生は嬉しそうで、中には「大事に取っておいて将来こどもに見せたい」などと言う学生もいた。

2. 日程

春学期の授業の大部分は、指定文献の輪読（要約練習）と論文作法の説明に充てる。また、5月の連休明けと夏休み前に2回のテーマ発表を行ってテーマを決定してしまい、夏休み中に資料収集を行うよう指導する。秋学期に入ると、テーマ発表1回のあと下書き発表に入り、12月中に完成稿を提出、1月にレポート集を配布する。

不明な事項をすぐに調べられるよう、履修者数が5名前後までの場合、授業はなるべく来往舎の研究室で行う。「課外活動」と称し、スペイン語・ポルトガル語圏に関係する展覧会などに全員で出かけることもある（2002年度は国立西洋美術館『プラド美術館展』、2004年度はパルコ・ミュージアム『チェ・ゲバラ写真展』）。

2006年度までは履修生がもっとも多い年で10名だったので、質疑応答、資料収集の手助け、下書き添削などで学生1人1人に十分な目配りをすることができた。しかし、10名を超えることがあれば、この方法で運営できるかどうかは厳しいと思われる。

3. 教材プリント

教材として、次のプリントを配布する。「テーマ発表レジュメ作成について」「レポート・論文の作成について」「イベリア史関連邦語文献」「Word Windows XPによるスペイン語入力の設定」「レポート実例（前年度のものから1つを選ぶ）」の5点である。

「テーマ発表レジュメ作成について」には、テーマの構想全体を示しつつ、各章のキーワードをあげて最小限の説明を書くこと、一見した時の分かりやすさが大事であること、「テーマ発表」を回を重ねるに従い進化させていくべきであることなどを、ヴァーチャルな例をあげて説明してある。

「レポート・論文の作成について」には、やはりヴァーチャルな例をあげながら、引用文献のデータの並べ方、外国の固有名詞が登場する際には原語表記が必須であること、注の付け方、文献表

の作成ルールなどの論文作法を網羅的に説明し、これに則ったレポート作成手順を書いてある。

さらに「レポート実例」を使って、論文作法をおさらいする。「Word Windows XPによるスペイン語入力の設定」は、英語にはない特殊文字を入力する際どうするか、これを知らない学生がほとんどなので、スペイン語を例に説明してある。

基本的参考文献は「イベリア史関連邦語文献」にまとめてある。イペロアメリカをテーマに選ぶ学生もいるが、イペロアメリカを構成する国の数は20以上に及ぶし、筆者の専門外なのでイベリア史に限定してある。これの充実は、今後の重要課題である。

4. 授業評価アンケート

アンケートの質問項目は下の4項目である。

1. テーマ発表・下書き発表の方法（数回行い段階的に詳しくしていく、聞いている側はとにかく一言発言する、など）はいかがでしたか？
2. 教材プリントは分かりやすくできていましたか？ また実際にレポートを書く際の程度参考になりましたか？
3. 論文作法に基づいたレポートを書いてみて、何か感想はありますか？
4. その他何でも（よかった点、不満な点、改善すべき点など）。

回答に字数制限はなく、提出は任意で、忌憚のない感想をもらいたいので無記名・ワープロ書き。とは言っても回答を見れば大体誰が書いたのか察しがつく。それで分かったのだが、女子の方の回答率が抜群に高い。

以上のような形で授業を行うようになったのは、開講3年目の2002年度からである。1年目と2年目は毎週冷や汗を掻きながらの授業で、あの2年間に筆者の総合教育セミナーを取った学生諸君に対しては、今でも申し訳ない思いを抱いている。各自が決めたテーマに関する文献を紹介して読むことを促し、その結果報告をさせたり下書きを提出させたりしながら、論文作法に関しては、教材を配りはしたものの、「それを参考にしなさい」と言っただけだった。しかし、それでは効果はほとんどなかった。特に、注をつける、文献のデータを厳密な規則に従って示した参考文献表をつける、などの細かいことは、「プリントを見なさい」と言うだけでは、ほとんどの学生が自分ではできなかった。

そこで、3年目からは上記のような3部構成とし、授業における様々なルールも作った。いちばんの懸案だった論文作法をどう教えるかについては、教材プリントを授業で読み、かつ、それが実践されるとどうなるかを具体例で確認するという方法を取った。これは、正直なところ退屈なことである。また、論文作法を学ぶのは初めてとはいえ、単なるマニュアルの類を授業で一斉に習わされる学生が、自分の知性を見くびられていると思わないかなどという不安も抱いたが、これは杞憂

だった。学生は、「一つ新たな技術ができるようになる度に喜びを感じることができた」とスキル習得の快感を覚えるようである。

Ⅲ. 学生およびテーマさまざま

この第Ⅲ章以下では、データを完全に保存している2002年度以降の「イベリアとイペロアメリカの歴史・文化」について述べる。まず、本章では、履修者数・学年・履修外国語・動機・テーマなどについて述べる。

1. 履修生数

履修者は多くない。下のように2006年度の10名が最高だった。2年生が多いが、1年生と2年生の本質的違いはなく、1年生の方が2年生よりも緊張する位である。

	2002	2004	2005	2006
1年生	1	0	1	1
2年生	4	5	2	9

2. 履修外国語

履修生全員がスペイン語履修生ではない。下表のように、スペイン語履修者が少数派だった年度もある。また、フランス語履修者は今までのところゼロだが、その理由は不明である。

	2002	2004	2005	2006
独	0	1	0	2
仏	0	0	0	0
西	4	1	2	7
中	1	3	1	1

3. 履修動機

履修動機に共通しているのは、少人数制の授業だから、論文作法を習得したいから、プレゼンテーションに慣れたいから、の3点である。これ以外に、スペイン語履修者には、スペイン語圏に関して何かを深く知りたいからという動機がある。

スペイン語以外を取っている学生の履修動機は、次のようなものである（カッコ内は履修外国語とレポートのテーマ）。「歴史が好きだから」（中、キリシタン時代）、「キリスト教とイスラーム教の相克に興味がある」（独、後ウマイヤ朝）、「他言語圏の文化も知ってみたいと思ったから」（独、

レコンキスタ)という広い観点から選んだ者や、「地域文化論をとってスペインに興味を持った」(中、コロンの大西洋航海)、「中国語履修を申告した後でスペイン文化・美術に興味を持ってしまったから」(中、ガウディー)などと、大学入学後にスペイン語圏に興味を抱いた学生もいる。「スペインに旅行に行ったから」(中)という理由で履修し、最終的には何故かブラジルをテーマに選んだ学生もいた。中には「スペイン語をとってキャンプ・ノウ(サッカーのスペイン・リーグのFCバルセローナのホーム・スタジアム)に行くことが夢だったのにスペイン語クラスに入れなかったから」という学生もいたが、この学生はスペイン・サッカーに関し規定枚数の2倍以上に及ぶレポートを仕上げ、筆者を含む全員を圧倒した。

4. レポートのテーマ

レポートのテーマを国・地域および時代別にまとめると下表のようになる。(網掛けしてあるものはスペイン語以外を履修している学生のもの。)

傾向を次のようにまとめることができるだろう。宗教やナショナリズムという日本では比較的対立がゆるやかな問題、日本文化とはまったく異なる文化をテーマとしたもの、美術の中でも建築(なぜか全員女子、そしてガウディーが人気)、音楽・スポーツという学生の趣味を直接反映したものの。時代・地域に関しては、古代はゼロだが中世から現代まで満遍なく選ばれている。そして、全体の4分の1がイベロアメリカであり、学生の興味が多様であることがわかる。

	(日本・) スペイン・ポルトガル	イベロアメリカ
中世	後ウマイヤ朝 レコンキスタ	メスキータ 中世のトレード
近代	イサベルとコロン キリシタン(2名中1名が西語以外) ポルトガルのスペイン帝国への併合と独立	スペイン無敵艦隊 ブラジルのモノカルチャー経済 ジャガイモ
現代	グエル公園 スペイン内戦 サグラダ・ファミリア聖堂(2名) スペイン・サッカー(2名中1名が西語以外)	カタルーニャ・ナショナリズム フランシスコ・フランコ 米国のラテン・ポップ サンバの歴史 キューバ野球

IV. 授業内容

本章では授業内容に関し、1. レポーター形式の輪読・要約練習、2. テーマ発表、3. 下書き発表、4. その他（論文作法、資料・文献収集など）の4つに分けて述べる。

1. レポーター形式の輪読：「要約に個性があらわれる」

学生1人1人が順番で指定文献を原文の半分程度に要約し、それを授業で読み上げる。発表者以外には必ず一言発言させる。擬似プレゼンテーションの雰囲気を作って慣れてもらうためである。発言は、ワープロ変換ミスや文章の間違いの指摘、内容に関する質問など何でもよい。何も言うことがない場合は、ケチをつける所がない、すなわち「よい」ということなので、それをポジティブに表現して褒め言葉を述べよと指導する。

学生には前もって、この教科書要約作業は地味で退屈だが重要だと説明する。理由は次の通りである。一般教養科目で、ましてや商学部の学生が専門外のテーマで書くレポートは、しょせんは何冊かの文献からの引用のパッチワークにならざるを得ない。ただし、引用を行う際、文献の文言をそのまま引用する場合と、内容を自分なりにまとめて叙述を作り上げる場合を厳密に区別せねばならない。後者を行う前に、教科書要約の練習を通して文章の内容把握の練習をしておくことは、非常に役に立つ。

同時に、教科書要約は、実践的日本語教室の役割も果たしている。教科書として使っているスペイン・ポルトガル史の文献（翻訳書）を選んだ理由の1つは、文章が明快なことである。こうした文章を精読し要約することを通じ、学生に、レポートに相応しいきちんとした日本語に自然に慣れてもらうことが要約練習の目的の1つである。

いちばん大事なことは、ある文章の要約とはそのエッセンスを述べることに他ならず、それが何であるかを把握し余分な部分を削って、要約者は元の文章に似て非なる独自の文章をつくるので、要約にも個性があらわれるということである。

要約練習のはじめの頃はなかなか質問・コメントが出ず、「いいと思います」ばかりなので、教員がせいぜい誤字脱字・文章の誤りなどを指摘し、他人の文章を批判的に読み誤りや疑問点を指摘することは、ケチを付けるのではなく書き手によい結果をもたらす建設的批判なのだと説明する。これを学生はすぐに学習し、自分が気づかないことを別人が気づくと「なんだか悔しかった」などという感想を持つに至る。

内容に関する質問が出ると、たいていの場合発表者は答えられないので、教員が説明する。要約する際に知らない事項が出てくると要約そのものが上手くできないので資料にあたって調べるといふ学生もいるが、たいていの学生はそこまではしない。ただ、「質問を予想して準備しておくべき

だった」という調査へのオブセッションはかすかながら芽生えるようで、これは要約作業の副産物である。

また、要約をさせると学生各自の日本語能力の特徴が露になる場合もある。たいていは読みやすく書いてあるが、その読みやすさが卓越した上手い文章を書く学生がいる。一方、主述の一致・助詞の使い方・主語と目的語の区別といったことができず意味不明瞭な文章しか書けない学生が稀にいる。さらに、文章ではなく、キーワード・矢印・幾何学模様のみを用いた要約を作ってくる学生が今までに1名いた。普段から文章よりは図表の方が何事も理解しやすいので（おそらくこういう認識パターンの持ち主だと思われる）、レポートも図表で作りたくて希望したが、これは、総合教育セミナーの目的の1つは文章による表現力養成であるからという理由で退けた。

教科書の要約とはいえ、少人数なので順番が早く回ってほとんど毎週あたるので、学生にとって最初は簡単ではないらしい。しかし、「文章をまとめる力を育成する上で大変役に立った」「回を重ねるにつれて要約力が上がることが実感できて嬉しかった」とか、「自分で要約することによって内容をより理解でき」「スペイン史に関する知識がついた」と、退屈な作業を学生に強いていると気を遣う教員にとっては嬉しい感想が返ってきた。また、「この最初の要約作業の大切さは自分が決めたテーマでレポートを書いていくうちに強く実感していきました。これを初めに行なっていなかったら文献を読むのはもっと苦勞していたと思います」と、読書に取り組む姿勢や読解力向上にも効果があったことが分かる。

2. テーマ発表：「最良の答えは“分かりません”」

「テーマ発表」において学生は、曖昧なアイデアから出発し、数回かけて徐々にレポートの構成や内容を明確にしつつ、調査結果の発表を行う。たいていの学生は大汗をかいて緊張するので、教員は学生をより大げさに励まし、同時にプレッシャーも与える。筆者自身が留学時代に恩師の1人から受けた激励でいちばん印象的だったのが、「あなたのテーマについてはあなたが世界一よく知っている」ということである。教員もすべてを知っているわけではないので知識に関しては学生に劣る（これは学生を励ますため、あるいは謙遜からの言葉だったろうが）、ただし論理的思考にはより慣れているので指導ができるのだ、という激励だった。これをそのまま学生に言って励ます。同時に、この場を仕切るのはあなたであり、教員はここからは黒子ですと宣言し、質問への答えに窮して助けを求める視線を注がれても容易には介入せず、司会役に徹して、あくまでも発表者自身が事態收拾を図るよう促す。

他の学生はやはり何でもよいから一言ものを言わなくてはならない。沈黙の代わりに賞賛を、とあらためて強いる。これには効果がある。「クラスの人や先生が、指摘の前にまず褒めてくれたので、クラスがとても和やかな雰囲気になってよかった」そうである。また、全員にアイ・コンタクトの重要性を説明する。発表者には、台本から顔を上げて必ず全員の顔を見渡し反応を見ながらゆ

っくり「語りかける」ように、他の学生には、発表者と目があつたら頷いたり視線に表情を与えたりして「君の話わかるよ」という無言のメッセージを返して発表者を元気づけるよう指導する。

何度も繰り返し言うのが「最良の答えは“分かりません”」だ。これも前出の恩師から言われたことである。質問に対する最適の答えができない場合、手持ちの知識をつなぎ合わせて近似値に到達しようと試みても、ほとんどの場合質問者の納得できる答えにはならない。その際、発表者自身にとっても質問者にとっても最良の答えは、「分からない」なのである。質問に答えられないことで生じる羞恥心から収拾し難い展開を招くよりは、「分からない」と素直に白状して次回の発表までに調べればよいのである。

テーマ発表の感想は、次のようなものである。発表を数回にわたって行うことに対しては、「先生や他の生徒の意見を何度も聞けるのでよかった」「概説書から専門書へと段階を追って文献を読むことになるのでよい」「数回行なうことで段階的に理解が深まり、テーマの肉付けがしやすかった」など。質疑応答に関しては、「人に見てもらってほめてもらうことで自信がついた」「客観的な意見を聞くことで自己満足に陥ることがなかった」「自分では気づかない点を指摘してもらえるのでよかった」など。また、「わかりやすくまとめて話すとなると、やはり準備なしでは上手く話せなかった」「他人の発表を聞いた後すぐに発言しなければならなかったことは、相手の発表を聞く時により緊張感が持てた」という、フォーマルなコミュニケーションに臨んでの感想も興味深い。

3. 下書き発表：「“私”を消せ」

下書き発表は規定枚数400字×10枚から始めて毎回5枚ずつ増やし、400字×25枚の「下書き最終版」まですべて提出させる。初回において発表者は、自分の下書きをすべて読み上げ、他の学生は質問・コメントなど必ず1回は発言する。特に、文章に関しては、ワープロの変換ミスや「てにをは」の間違いはもちろん、ロジックや言葉づかいに分かりにくい箇所があれば、遠慮なく学生から指摘させる。第2回目からは、加筆・修正した部分のみを対象に同じことを繰り返していく。

教員は、学生にとっては調査に難儀を極めるであろうというデータは調べて補足する。理解し難い文章を直したり、説明不足だと思われる箇所を指摘して文章を補ったりするようにも指示する。しかし、指示されただけでは学生自身が直せない場合も多いので、その際は文章を考えて加筆・修正する。文献引用の仕方なども学生自身が行うと最初はミスが多いので徹底的に直す。

この下書き発表に関しては、「どうかと思う」と異議を唱える学生もいた。しかし、内容のレジュメに従ったプレゼンテーションとも指定文献の要約とも異なる、学生が自分で書いたものを精読し合い文章を評価し合うこの作業は、たいへん大事だと筆者は考えている。総合教育セミナーの目的の1つである日本語能力の養成のために敢えて考えた方法なので、学生から圧倒的なクレームが出ない限り、当面続けていくつもりである。

下書きの際に注意するのは、「“私”を消せ」ということである。スペイン・サッカーでも何でも

よいが、「かっこいい」「すごい」「好き」「面白い」という感情をいや応なしに抱いてしまう対象の存在が、レポートの出発点のはずである。「はじめに」と「結び」以外の部分では、対象とするものが、「面白く」「かっこよく」「すごい」理由を、他人にとっても説得力のある言葉で客観的に述べ尽くさなければならない。よって、そこでは主語を消し、テーマ発表の際には許された「僕／私は～と思います」は主語なしで「～と思われる」と徹底して改めるよう指導する。もちろん、単なる印象批評ではないので、安易に「～と思われる」と文章を結ばばよいのではなく、「～と思われる」理由を文献にあたって出来る限り述べた上のことである。

また、感想文ではないので厳かで格調高い言葉づかいをするように指導する。例えば、テーマ発表で多くの学生が使う「面白い」は「興味深い」に改めさせる。もとより授業の初回から、いかなる場合においてもタメ口は許さない。くだけた表現を使ってもよいが、必ず「～です／ます」調で話し、授業は、日常とは異質な、フォーマルなコミュニケーションを行う場であることを尊重してもらう。この「～です／ます」調を、下書きにおいては「～である」に変えさせ、この語尾の変化により文章の説得力が増す効果があるとも説明する。これには、文献を読んで下書きを進めていくに従って学生はすぐに慣れる。

もう1つ注意するのは、しょせんは「パッチワーク」にすぎないにしても、その縫い目を上手く隠せというである。複数の文献・資料から取ってきたことの継ぎ接ぎであることを読み手に悟られないよう、学術用語の統一はもちろんのこと、文言や語調が統一され、一貫性のある叙述を作り出す工夫をせよと注意する。とは言え、文献のほとんど丸写しであることが分かる場合もあり、これは添削の段階で気がつく限り指摘して書き直させる。

「はじめに」と「結び」では主語の使用を許可する。むしろ、テーマに対する各自の偏愛ぶりを存分に述べるようにと鼓舞する。ただし、「僕」は不可で「私」か「筆者」のみとする。せいぜい大げさな言葉遣いで、自分の選んだテーマがいかに素晴らしいものかと高らかに讃えよ、ただしそれがあたかも万人にとっての真理であるかの如く、格調高く堂々たる言葉づかいをしろと活を入れると、学生は各自それなりに気合の入った言葉でレポートを締めくくる。以下に引用するのは、「ジャガイモ」というタイトルのレポートの結びである。

先に述べたように、ジャガイモが救荒作物であることを決して忘れてはならない。食糧危機の到来が世界で叫ばれている現在、ジャガイモが再び脚光を浴びようになるのは間違いない。ジャガイモにはたくさんの歴史と、未知なる可能性が詰まっているのである。

まるでジャガイモさえ食べていれば人類は永久不滅であるかの如き大仰な主張だが、学生も最後だけは遠慮せず楽しんでくれれば幸いである。

4. その他（資料収集、ITリテラシーなど）：「東スポ系」はいけません

授業開始早々から、なるべく早くテーマを決めて資料探しに取りかかるよう学生を急かす。週1コマの授業であるうえ授業前半には要約当番もあたるので、授業外の時間を資料探しに費やすことは学生にとって負担だろうが、時間をかけて丁寧にテーマ選びや文献精読をして欲しいので、せいで急かす。教員も、実に多彩なテーマの文献をメディアセンターのOPACやアマゾンで検索して紹介に努める。また、どうしても邦語文献が見つからないトピックに関しては、英語やスペイン語の資料をがんばって読むよう学生を励まし、翻訳をしてやることもある。

資料収集に関して注意するのが、テーマによっては玉石混交である文献を吟味せよということである。新聞を例に挙げ、論文では朝日・読売・毎日・日本経済・日刊スポーツなどは参考文献扱いで引用してよいが、「東京スポーツ」は参考文献として相応しくないと説明すると、すんなり納得してくれる。しかし、レポート完成まで「東スポ系」はいけません」を繰り返すことになる。特に、ポピュラー音楽、スポーツといったいわばサブ・カルチャーをテーマに選んだ学生には、これらが学術研究の対象となった歴史が浅いことから、文献を選ぶ際に「あやしい」本かどうか嗅覚を働かせる必要があると繰り返す。

テーマに関わらず注意を喚起するのがインターネットによる資料探しである。原則としてインターネットから取った資料は「東スポ系」扱いにする。しかし、特にテーマ発表の最初の段階では何らかのHPのプリント・アウトを手に行っている学生も少なくない。これは厳しく見咎めて次回からの使用を禁じる。使用許可には条件をつける。例えばスペイン・サッカーのクラブ・チーム公式HP、入手困難な学術雑誌掲載論文を著者が自分のHPにアップしている場合などである。いずれも内容に関するオーソリティーによる検閲が行われていたり、著作権の問題が発生したりしない場合である。学生が頼りがちなのが『ウィキペディア』で、これは確かに便利であるが、参考文献としての使用は原則として禁じる。理由は、管理者による内容検閲は行われているようだが、誰でも書き込みができるため情報の信憑性が完全ではないこと、また著作権が曖昧な資料だからである。（ただし、文献では検索困難な事項については最終的に使用を許可することもある。）資料の媒体は、インターネットに限らず多様化している。テーマによってはCDやDVDも資料になりうるので、その場合も文献資料と同様のデータを漏れなく記すよう指導する。

著作権を厳密に尊重せねばならないことは「論文作法」の1つとして教える。文献の文章や文言をそのまま引用する場合はカギカッコを付けて「丸写し」だと明示しなければならない。著作権の蹂躪は犯罪であり、総合教育セミナーのレポート集のように、市販されず著作権蹂躪が世間に露見しない場合であっても、倫理的問題として著作権は絶対に守らなければならないと強調する。とは言え、明らかに注まで参考文献から丸写ししてくる場合もあり、そうした場合はあらためて説教する。これを素直に聞いて直す学生ばかりなのを見ると、学生にとって著作権法遵守は未だ非日常的事柄だっただけで、狡猾な手抜きを意図したわけではなかったと思われる。

IT リテラシーに関しては、今までのところ「イベリアとイベロアメリカの歴史・文化」は、Word 使用を規則とするのみでほとんどアナログ授業だった。脚注、英語以外の外国語入力といった機能を使用したことがない学生ばかりだったので、Power Point など使用した暁にはどうなるかという懸念を抱いていた。また、筆者が日頃感じている Power Point のデメリットも学生に説明してきた。Power Point のメリットは、きれいな図表を容易に作成することができ、明快で分かりやすいプレゼンテーションを行うのに最適のツールだということである。しかし、Power Point の画面上に展開される図表や体言止めの実に短い文言の間に存在するロジックは、所詮ことばで発表者が表現しなければならない。画面上の「→」を「やじるし」と読むのは異常で、「→」が示す因果関係はことばで表現しなければならない。そこで、総合教育セミナーの目的の1つがことばや文章の表現力養成であることから、Power Point は使用しない方針だった。

しかし、スキャナによる図版の取り込みや電子メールによるレポート提出を導入したところ速やかに定着し、学生の IT 技術習得が、教員の手取り足取りの指導なしでも意外に容易に進むことが分かったので2007年度からは Power Point を使用する予定である。また、メディア・センターのKITIE など、さまざまな学内教育研究支援システムも活用したい。

学生との連絡には、携帯メールも使う。残り日程の授業内容を変更した、よさそうな資料が見つかった、添削が出来たので取りに来てくれ、などといった細かい連絡を授業日以外にも頻繁に行うためである。これを通じて学生各自の「マメさ」もよく分かり、その「マメさ」がレポート作成過程や果ては文体にもある程度反映されるのが、筆者にとっては面白い現象である。

V. 最後に

以上、筆者担当の総合教育セミナーの実践結果を報告してきた。筆者自身による結論を記す代わりに、学生諸君の感想を引用して本稿を締めくりたい。

- ・「ひとつの授業でコンスタントに勉強したのはこの授業が初めてかもしれない。」
- ・「授業を重ねて皆さんと話すようになり、自分のテーマも決まって本格的な作業に入っていくうちに、追われるという意識から積極的に取り組むという意識に変わっていった気がします。(……)あのレポートが完成した時の達成感は一生涯忘れないと思います。」
- ・「いつもは大教室で、名前も知らない人達と一緒に授業を受けているが、このセミナーでは人数も少なかったので、自分自身が積極的になれたし、生徒間でも意見や情報の交換ができた。」
- ・「ただスペインへの憧れに近い気持ちからとった授業であったが、完成された自分のレポートを見ると、かけた時間が長いだけに充実感を感じることができる。」

- ・「少人数で初めはどのようなことか不安だったけれど、少人数でしかできないことがたくさんできたと思う。(……)こんなに長いレポートを書いたのは初めてのことであったし、この1年の学習面で一番力を入れたのはこのレポート作成だったから、なんとか完成することができて、今は達成感と解放感と安心感で溢れている。このレポート作成を通してアカデミック・ライティングやパソコンの様々な機能を知ることができて、かなり成長することができたと感じる。」

ガイダンス時には、前年度のレポート集を見て不安に顔をくもらせる学生諸君に、同様の体裁のレポート集を9ヵ月後に配る際の筆者の嬉しさ、安心感、達成感は、学生諸君のそれに勝るとも劣らない。この場をお借りして、学生諸君に心からの感謝を申し上げる。